

市民にとって自然環境とは何か

—百姓仕事と田んぼのめぐみ—

宇根 豊

特定非営利活動法人 農と自然の研究所 代表理事
〒819-1631 福岡県糸島郡二丈町田地原 1168

1、自然とは何か・問題の所在

「田んぼは自然でしょうか」と尋ねると、首をひねって、しばし考え込む人が多い。そこで、図1を示して、番号で答えてもらうと、多くの百姓は“4”と答え、多くの都会人は“2”と答える。「最も価値のある自然はどこですか？」という問いには、“1”という答えが、田舎でも都会でもほとんどである。

こういう自然観は果たして、日本人の伝統的な自然観だろうか。難題は二つある。ひとつは、自然のことを考えたり、問うときに、「自然」という言葉・概念を使用せざるをえないことに起因する罣（自然に対する先入観を与えてしまうこと）にほとんど誰も気づかない、ということだ。図1は、当然のように自然と人間を分けている。分けているからこそ、「自然」という概念が成り立っていることを、日本人は意識しない。もちろんこれはヨーロッパからの輸入思想であって、日本人の伝統的な自然観（すでにこういう言い回しが自家撞着に陥っているのだが、「自然観」とでも言

わざるをえないのだから事態は深刻なのだ）とは、まったく異なる。そのことを意識できないぐらいに、ヨーロッパ的な自然観に染まってい、とり入れてしまった、と言えるだろうか。もしそうであるなら、事態は案外簡単に整理できるだろう。ところがそうはいかないのである。こうした二分法にどこかで違和感を現代日本人であっても、とくに年配者は抱いているのも事実である。だからこそ、先の質問に簡単に答えられない人も多い。

次の難題はさらに、根が深い。図1のような「世界認識」は、自然に働きかける農業の構造を誤解させることになったのではないかと、私は考える。“1”の原生自然が最も価値ある自然だという価値観は、(1)西洋では、「神が造ったままの自然だ」という意味で理解しやすいが、(2)一方、農業とは人間がその自然を壊していく形態だという理解も生み出すことになった。（もっとも、それゆえに農業と環境との関係も早くから問い詰められてきたことには敬意を払いたい）(3)それが、果たして科学的に証明できるのか、簡単ではない。生態学から提案された中程度攪乱説はむしろ伝統的な農業を擁護する理論になりつつあるし、生物多様性はどちらからも利用できる。(4)さらに、日本では自然と人間を対立的にとらえてこなかった伝統があるので、こういう図式では、自然の豊かさは表現できなくなる。つまり「自然」という概念を生み出すことがなかった仕事と

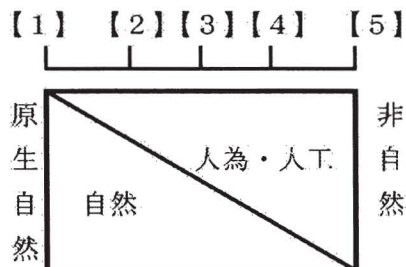


図1 自然と人間の関係モデル

くらしの評価はできなくなる。

このように、私たち日本人にとっては、「自然とは何か」は、明治以降（もちろんその前も）本格的に問われたことはなかったのではないだろうか。ましてや、農業においては、自然は「農業生産の制限要因」としては研究対象ではあったが、農業によって豊かになり、日本人の好きな自然になったことは、つまり日本人の「自然観」を形成してきたことには、ほとんど踏み込んだ研究や考察はなかった。

それを私たちの農と自然の研究所は、少しずつ限定的ではあるがやってきた。この成果の核心を示したい。

2、世界認識の方法論

ところで、伝統的な百姓仕事や百姓暮らしの中にあつた、農学や科学とは別の「世界認識」とはどのようなものであつたのだろうか。今日は、四つの局面で代表させてみたい。

1) 「めぐみ」としてとらえる

落ち穂拾いの風景をすっかり見かけなくなった。もちろんコンバイン収穫になって、落ち穂は拾いにくいことも理由だが、それよりもそこまでして、米を穫らなくてもいい、という精神が落ち穂拾いを廃れさせている。しかし、もっと深い理由にこの頃になって気がついた。

かつての百姓は米がたくさん穫れると「天地のめぐみが大きかったからだ」と、天地(自然)に感謝したものだった。現代では、「自分の手入れが、自分が採用している技術が優れているからだ」と自分を褒める場合が多い。

米を天地からの「めぐみ」だと思えば、めぐみをおろそかにすることは気が引ける。「もったいない」と感じるだろう。

一方、米の生産を自分の行為の結果だと思うなら、落ち穂を拾うか拾わないかは、自分が決めることだ。「もったいない」も落ち穂拾いの労賃と収益とを天秤にかけて決まることになる。2㎡に一本の落ち穂が落ちているなら、10アールに五

百本で、約1kgになる。米の価格にすれば、約300円。この収穫のために30分かかるなら、時給600円。（さらに粳摺り、精米の仕事も必要になる。）これではやる気になれない、という判断は合理的だが、大事な世界を失うことになるかもしれない。

最近、驚くようなことを地元の93歳になる百姓夫婦に聞いた。これまでの自分の不明を恥じたものだった。「落ち穂は百姓以外の人ならだれでも、拾っていいという習慣だった。」百姓は決して拾わなかった、と言うのだった。これは凄いいことだったのではないだろうか。「稲刈りが終わると、袋を持った人たちが待っていて、田で落ち穂拾いに励んでいたものだった。」と懐かしんでいた。

「消費者との交流」なんてものではない。天地の「めぐみ」を、分かちあう思想が健在だった時代があつたのである。決して百姓から消費者への「おめぐみ」ではなかった。

現在のコンバイン収穫では、落ち穂が1㎡に約千粒、つまりシイナや未熟粒が多いから約10g、ということは十アールあたり約10kgにもなる。相当な量だと言えよう。この「めぐみ」を雁や白鳥や鶴などの冬鳥がいただいている意味と価値をもう一度考えてみたい。一羽の雁が食べる粳は一日に約100gだとすると、一日に約10㎡の田んぼが必要になる。10アールで約100日分の食べものが雁のために、めぐみとして提供されている。

農が地元にあたりまえに存在しなければならない最大の理由は、農があればこそもたらされる「めぐみ」が、人間以外にも届けられるということだ。ここではわかりやすい「落ち穂」「落ち粳」を例に挙げたが、これ以外にも「めぐみ」は無尽蔵にある。こういう世界の構造を、この国の百姓はつくりあげてきた。

どうだろうか。内側からの「世界認識」は、天地のめぐみに行き着く。「めぐみ」とは、すぐれて農的な世界認識であつた。しかしこの「天地」

とは「自然」とは、大きく異なることに留意したい。近代化された「生産」から、こうした「めぐみ」がこぼれ落ちたことに目をそらさずに、この「めぐみ」を拾いあげ、もういちど世界に戻していく学はないものか。

2) 「できる」から「つくる」への変質

「米ができる」から、「米をつくる」への転換は、いつ始まったのだろうか。たとえば「安全性」を求める心情は、当然「トレーサビリティ」という管理体制に行き着くだろう。それも不断の立ち入り検査と内部告発がないと、腐敗する。こういう体制が、10年後も50年後も続くのだろうか。そもそも、近代化の何がこうした事態を招いたのだろうか。

数年前に隣の婆ちゃんから、トマトをもらった。「あんたの畑のトマトは、今年は早々と枯れあがったね。うちはまだなっとるから、持ってきてやったとよ。」と言う。ここで私は、「農薬はいつ散布したの？何を散布したの？安全使用基準は守ってるよね？残留基準をクリアしているか、分析してみた？」などと、安全性のトレーサビリティ精神を発揮しようとは思わない。うちのトマトの不出来を気にかけ、持ってきてくれた婆ちゃんの優しさに、感謝してありがたくいただいた。

この場合の「いただく」対象は、もちろんトマトだが、婆ちゃんの情愛でもあり、天地のめぐみでもある。婆ちゃんはトマトを育て、トマトができたのである、婆ちゃんが「つくった」のではない、と言い切れるだろうか。もし婆ちゃんが「つくった」のなら、安全性の責任は、婆ちゃんにある。一方トマトが、「できた」のなら、責任は天地にある。こう考えてくると、婆ちゃんが農薬を使用していることは、決定的な分水嶺ではないが、たしかに「できる」から「つくる」へと移行していると言わざるをえない。

「農薬」「化学肥料」の使用は、「できる」から「つくる」への移行を決定的にしたのではない

だろうか。だから有機農業は、「つくる」への違和感を持ち続けてきたのではないだろうか。もちろん有機農業がすべて「できる」感覚で営まれているわけではないが、「できる」というスタンスを堅持しなければ、「天地・自然のめぐみ」から遠ざかり、天地・自然という「世界認識」を失うことになるのではないだろうか。

「つくる」ことは、しんどいことである。すべてに責任を負わなければならない。だから手が回らず、眼が行き届かず、「自然環境への影響把握」がおろそかになった。安全性の確保も難しくなった。そのあげく、「トレーサビリティ」のための書類書きに専念しなければならなくなった。「書類」で「数値」で、安全を確かめなければならなくなったのは、近代化農業の当然の帰結だろう。それなのに、なぜ有機農業までが、「書類」を「数値」を要求されるのは、冗談を通り越して悲劇ではないか。

消費する側が、あまりに近代化されつくしているからである。食べものは「できる」のではなく「つくられ」ていると思っているからである。この闇をどう照らしたらいいのだろうか。

3) 仕事論と技術論のすれちがい

仕事にあって、技術にないものは何だろうか。いっぱいあるだろう。「稲」「伝統」「情念」「情愛」「経験」「人間関係」「自然関係」「天地有情」「カミ」「伝承」「子ども」「祭り」「民俗」……。逆に技術にあって、仕事にないものは何だろうか。もし、技術が仕事から抽出されたものなら、すべて仕事の中に含まれているから、そんなものは存在しない、ということになる。ところが、農業技術の中には、百姓仕事の中には存在しないものが存在する。それは、「国家」や「国民」「近代化」「科学」「生産性」などである。これが、新しく付け加えられたものなのか、それとも農をこういう篩でふるって、篩の上に残ったものを「技術」と命名したのかもしれない。

つまり「技術」は、仕事に比べれば、普遍性を

持ち、科学的で、国民国家にとっても有用なものだというイメージは、当然のことであって、そういうものとして形成されているのである。

一つの象徴的な例で示してみよう。畦の草刈りの時にカエルが前を横切る。その度に私は、草刈りを躊躇して、立ち止まることになる。こういうことが、秋になると数メートルおきに続く。この躊躇して、仕事が滞った時間を累計すると、半日で10分になった。果たして、この10分は私にとって、日本農業にとって、日本農政にとって、日本国民にとって、国家にとって、無駄な時間なのだろうか。

現代の農学では、いとも簡単に、こう答えるだろう。この時間は、米の経済価値にとっては、何の貢献もしない時間で、生産効率を落としている原因である、と。また、生態学者に、カエルという生きものを守っている時間だと弁護してほしいと懇願しても、「躊躇しなくなっても、せいぜい10アールあたり1000匹もいる沼ガエルを2、3匹斬り殺すぐらいなら、カエルの密度には影響はありませんよ」と、冷静な返事が返ってくるだろう。

私が躊躇する行為は、学問的には、意味のない行為だということになる。それは、国民にとっても、国家にとってもそうだということになるわけだ。近代化社会では、こうして、こうした百姓仕事の中の情愛を擁護し、価値づける技術論(思想)は衰えてきたのである。

しかし、別のまなざしもあってもいい。そこで私が、もしカエルに躊躇しないで畦草刈りをするようになれば、私は何を失うことになるだろうか。まちがいなく私の百姓としての、生きものの情感に反応する力は薄れ、生きものに包まれて生きる情念は死ぬ、と。そうなると、稲のまわりに広がる天地有情の世界と、稲の関係が見えなくなる。そして、この関係を語ることもなくなる。つまり、伝統的な世界認識を失うだろう。「農業技術」には、世界認識の道が通っていない。

3、世界認識のための新しい百姓仕事

「生きもの調査」が確実に広がっていこうとしている。これで私たちの農と自然の研究所も心おきなく2010年3月には解散できる。ところで、「生きもの調査」は科学的な世界認識を目指しているように見えるかもしれない。しかし前述したように、百姓が調べているのは、田んぼでもせいぜい100種に過ぎない。これくらいの種の実態をつかんで、どうして世界認識に持っていこうとしているのだろうか。最後にこの事例を解析しておこう。

1) 生きものを、なぜ調べねばならないのか

農学が「世界認識」に手を染めなかったために、田んぼでどういう自然の生きものが育っているかは、科学的にはわかっていない。たしかに「害虫」はまあまあ調査されているが、益虫、ただの虫にいたっては、ほとんど実態がわかっていない。従来 of 農学では、それでも別に不都合がなかったということだろう。しかし、

① 農産物以外の“めぐみ”を持ち出さないと、農が地元存在しなければならぬわけが説明できなくなった。「安くて安全な農産物なら、外国産でもいい」という意見に、説得力のある理由を示す必要が生じてきた。

② 身近な自然を代表している農地の生きものすらも、絶滅の危機に追い込まれてきた。殿様ガエル、タガメ、丸タニシ、ドジョウ、メダカなどは絶滅寸前である。

こういうことが、引き金となって、「田んぼの生きもの目録づくり」「生きもの調査」が始まったのだが、これを日本で最初に「農業政策」に組み立てたのが福岡県環境支払いであった(「県民と育む農の恵みモデル事業」という)。

2) 意外なタカラモノ

生きもの調査は、生きもの目録づくり(めぐみ台帳づくり)のための手段だが、驚くべきことに、調査自体が目的化してきた。つまり調査自体が楽しくなってきた、調査自体が仕事になってきたの

である。ここから、二つの大きなタカラモノ(財産)がもたらされた、と言っていい。

①「百姓の豊かなまなざし」が復活した。それは百姓仕事からもたらされる本来の能力だったのかもしれない。「タイコウチを30年ぶりに見た」と語っていた百姓の言葉は、タイコウチの存在とともに、30年間の彼のまなざしの不在に眼を開いている。つまり、自然とともに仕事へのまなざしが復活してきている。

②「田んぼの生きもの目録」が自動的にできあがった。それは、紙の野帳や報告用紙の中にもあるが、一番の所蔵庫は百姓の胸の中だろう。一人一人がタカラモノ(生きもの目録つまり世界認識の帳票)をこれからは抱きしめて、生きていくことになるのである。

③ 田んぼの“めぐみ”(多面的機能)に対して、「環境支払い」を本格的にやろうと思うと、当然ながら、ア)「支払い根拠」を明らかにしなければならない。次に、イ)どれくらい以上の水準に達すれば払うのかという「基準」が必要になる。さらに、ウ)その「水準」を一人一人の百姓が確かめる(調査する)方法がなければならない。最後に、エ)その百姓の申請が妥当なものかをチェックする方法が必要になる。

福岡県の「生きものへの環境支払い」は、このすべてに対応できる内容に組み立てられている。これらの4つの項目のうちもっとも重要なのが、イ)の「基準」であろう。残念ながら、3年間の百姓の調査にもかかわらず、県内全域に通用する画一的な「基準」は明確にならなかった。しかし、それよりももっと豊かなもの(百姓のまなざしや、生きもの目録など)がもたらされた、と言える。

3) 多面的機能を越えた「めぐみ」

百姓にとって「多面的機能」は外部からやってきた言葉・概念である。自分たちの実感とはかなりずれている。普段は意識しないコトを、「機能」として意識せよと迫られたわけである。「水田に

は洪水防止機能がある。」「水田には生物育成機能がある。」と言われても、そういうコトを目的に「稲作」をしているわけではなく、そういうコトが自分の百姓仕事の結果生じていると、実感することもない。ここが「農」のすごいところなのだが、これを百姓が実感し、自前の言葉で表現しないことには、この価値は誰にも伝わらないだろう。

「落水の時に、生きものが気になるようになりましたか」というアンケートに対して、「農めぐ」の参加者の57%が、そうだと答えている。(気にならないというのは10%である)これは生きものの「生・いのち」を感じているからである。その生と自分の落水という百姓仕事が濃密に関わり合っていることを意識しているからである。

こうして「生物育成機能」は、落水という百姓仕事と結びつくことによって、「機能」ではなく「実感」となり、意識される。ここから人に伝える言葉が生まれれば、それは「めぐみ」になり、家族や地域の人や消費者や県民と共有できる。

4) 「表現」「言葉」が一番大切

各地でよく聞かれることは、「まだ、こんなに生きものが生きていたのか」という驚きの言葉である。「ほんとうに、なつかしい」という言葉も聞いた。それは「今まで何を見ていたのだ」という深い反省を伴っているが、感動が過去の経験と結びついているところに最大の特徴がある。時の流れの中で、百姓も生きものも生きて来たが、両者の関係はだんだん希薄になって、それは日本社会の近代化の流れの中で、どうしてもなかったことだった。その流れの中で、いつの間にか姿を消した生きものも少なくなかったが、まだ生きのびて、こうして数十年ぶりに顔を見合わせる生きものがいる。

このひとときに、感動は生まれてくるものなのだ。そしてこの感動・感慨を言葉に変えるものが、「伝承したい」という百姓の伝統だろう。なぜなら、自分も生きものとの関係を体験を通じて、引

表1 あなたにとって田んぼの生きものの調査を実施する意義は何ですか？

	福岡県農のめぐみ地区		宮城県のグループ	
	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)
1. 減農薬・有機農業の効果を確かめるため	50	29.6	19	20.7
2. 農産物に付加価値をつけるため	4	2.4	15	16.3
3. 環境支払いの支援金をもらうため	7	4.1	2	2.2
4. 農業に対する見方や農政を変えるため	11	6.5	12	13.0
5. 環境を守るため	43	25.4	—	—
6. 地域のタカラモノさがし	5	3.0	—	—
7. 家族や地域の子どものため	1	0.6	7	7.6
8. 未来のため	6	3.6	14	15.2
9. 生きものの名前や生態を知るため	15	8.9	12	13.0
10. 自分の楽しみや勉強のため	6	3.6	11	12.0
11. その他	5	3.0	—	—
無効回答	16	9.5	—	—
小計	169	100.0	92	100.0

き継いできたからである。生きものへの“まなざし”は、時の流れを超えて伝わってきた農の文化である。これも「めぐみ」の一種かもしれない。

さて、ここで生まれる「言葉」がとても大切である。言葉こそが、「農のめぐみ」を伝えることができる。家族を、住民を、消費者を、田んぼに誘うことができる。このことを従来の「農政」はほとんど重視してこなかった。なぜなら「生産」が中心だったからだ。ここに来て、「食べもの」や「自然環境」や「生きもの」が話題にあがると、新しい自前の、地域からの表現でないと、実感が語れなくなった。その語りを引き出し、鍛える場を提供するような「農業政策」がやっと、地方から生まれたのである。

たぶん、この「環境支払い」の最大の成果は、

百姓と地域住民の体の中に生まれた「実感」と「言葉」だろうと思う。言い換えれば百姓本来の豊かな“まなざし＝世界認識”だったのだろう。

4、自然と人間の関係

私たちは田んぼの生きもの調査の結果を、図2のように表現している。ここでは、オタマジャクシに限定したが、福岡県の「環境支払い」では、地域ごとに数十種の生きものをこのようなポスターにしている。私はこのポスターを小学生たちに見せながら、こう尋ねることにしている。「みんなは、誰のためにごはんを食べてるの？」すると「自分が生きていくため」というような答えが返ってくる。「でもね、たまにはね、自分のためじゃなくて、オタマジャクシを育てるためにごはん

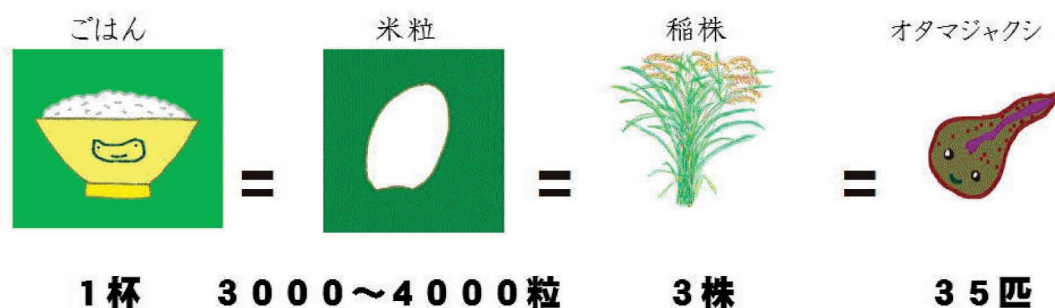


図2 人間とごはんの生きものの関係

んを食べよう、と試してみたら？」と言うと、笑いが教室中に広がっていく。「信じられない！」

「ウッソー！」「馬鹿みたい！」と声を上げる。

「そうだろうね。大人たちはもっと、信じてくれないかもしれないね。もっと想像しにくいことかもしれないね。でも、田んぼに出かけたときに、稲のまわりでオタマジャクシが育っていたよね。」と私は話しかける。いつの間にかイネは人間のためだけに存在するような錯覚を現代人はしている。イネ自身も自然のめぐみをいただいて育っている。このイネと自然の生きものとの関係を支えるためには、百姓だけの力では足りないものがある。たとえば、このイネとオタマジャクシとの関係を支えるためには、このイネを毎年きちんと消費してくれる、人間が必要なのだ。イネは「ごはん」となって、人間を自然と結んでくれる。この関係が、見えなくなったから、農と自然のつながりも見えなくなった。米を食べることは、農の重要な一部をなしている。これを「消費」ではなく、「自然保護」と呼ぶこともできるし、「食農」「自然観の陶冶」とも呼んでもいい。

私たちの新しい役割は、イネと自然の関係を新しくつくりあげることであろう。消費者も含めて、人間が自然と深くつきあうから、自然は輝き、そこからはカネになるものならないものも含めて、計り知れないめぐみがもたらされる。そのめぐみの総量を計る科学は、未だに存在しない。それを少しでもつくるために、人間は生きものの力を借りるしかない、と思う。この関係を支えるために、ごはんを食べる人間が育つことが、田んぼとイネと自然を守ることになる。

参考文献

1. 「天地有情の農学」宇根豊 (コモンズ) 2007
2. 「田んぼの生きもの全種リスト」桐谷圭治編 (農と自然の研究所、以下農自研) 2009
3. 「田んぼの生きもの指標」宇根豊編 (農自研) 2009
4. 「田んぼの草花指標」嶺田拓也、伊藤一幸編 (農自研) 2009
5. 「ふくおか農のめぐみ100」宇根豊編 (農自